

2020年ドバイ国際博覧会 日本館基本コンセプト

2018年11月5日
日本館事務局

日本館出展の前提：

ドバイ国際博覧会は、登録博として中東及びアフリカ地域で初となる国際博覧会である。メインテーマは“Connecting Minds, Creating the Future”（心をつなぎ、未来をつくる）であり、より良い世界を構築するためには、協力やパートナーシップが持つ力が重要であることを表現している。

日本館では、①国際社会における発信力向上、②産業の振興、③インバウンドの増加、④万博のレガシーの継承と創出、⑤次世代を担う人材の活躍を目指す。

“Connect”をキーワードに、日本独自の精神性、技術、文化等を素材とし、日本の力が切り拓く未来社会の可能性を、明確なビジョンとともに国際社会に対して発信していきたい。

日本館出展のビジョン：

日本は未来に向け、地球的な視野で、技術、人やアイデアの出会いを生み、それらを融合させることで、より良い世界へ向けたアクションを生み出していく。

日本は課題先進国であり、すでに数多くの解決策も生み出している。

その知見を踏まえ、世界に向けて問いを立て、そこに共感を生み、日本がイニシアティブをとって解決へ導いていく。

これからの世界にとって重要となるのは、出会い、共感し、そして動き出すこと。地球交差点としての日本が創り出す幸せな融和と革新。

この日本館ではその体験そのものを生み出したい。

The Crosspoint for the Future. Join. Sync. Act.

地球交差点(仮)

出会う・共感する・そして動き出す

建築コンセプト：

●シルクロードで「繋がり=交差」していた「中東と日本の文化・歴史」を象徴する幾何学文様

アラベスクにも通じる“交差点”を多く持つ伝統文様「麻の葉文様」を立体格子で表現。

見る角度や光の当たりかたにより、様々な表情を生む変化する建築。

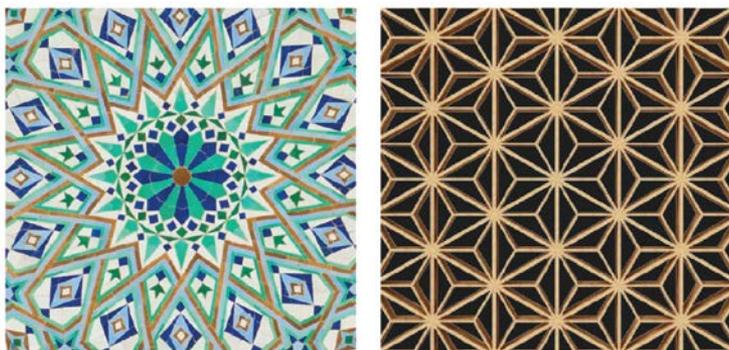
●古くから日本の美意識の中で大切にしてきた「光と影」

日除けと風を通す役目を持つ立体格子とテント膜で、多様な「光と影」を表現。

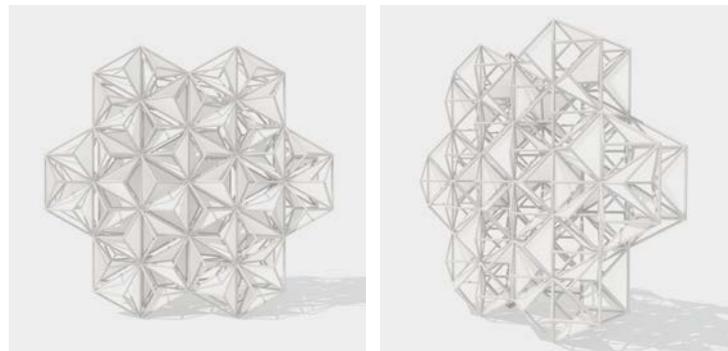
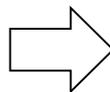
●日本らしい「水と風」を現代的に表現

「水」の循環システム、「風」の流れを利用した快適な建築空間を実現。

建築全体を環境装置とし、サスティナビリティに配慮した計画。



幾何学 / アラベスクと組子 → 構造体



素材 / 柔らかい皮膜 → 設備システム

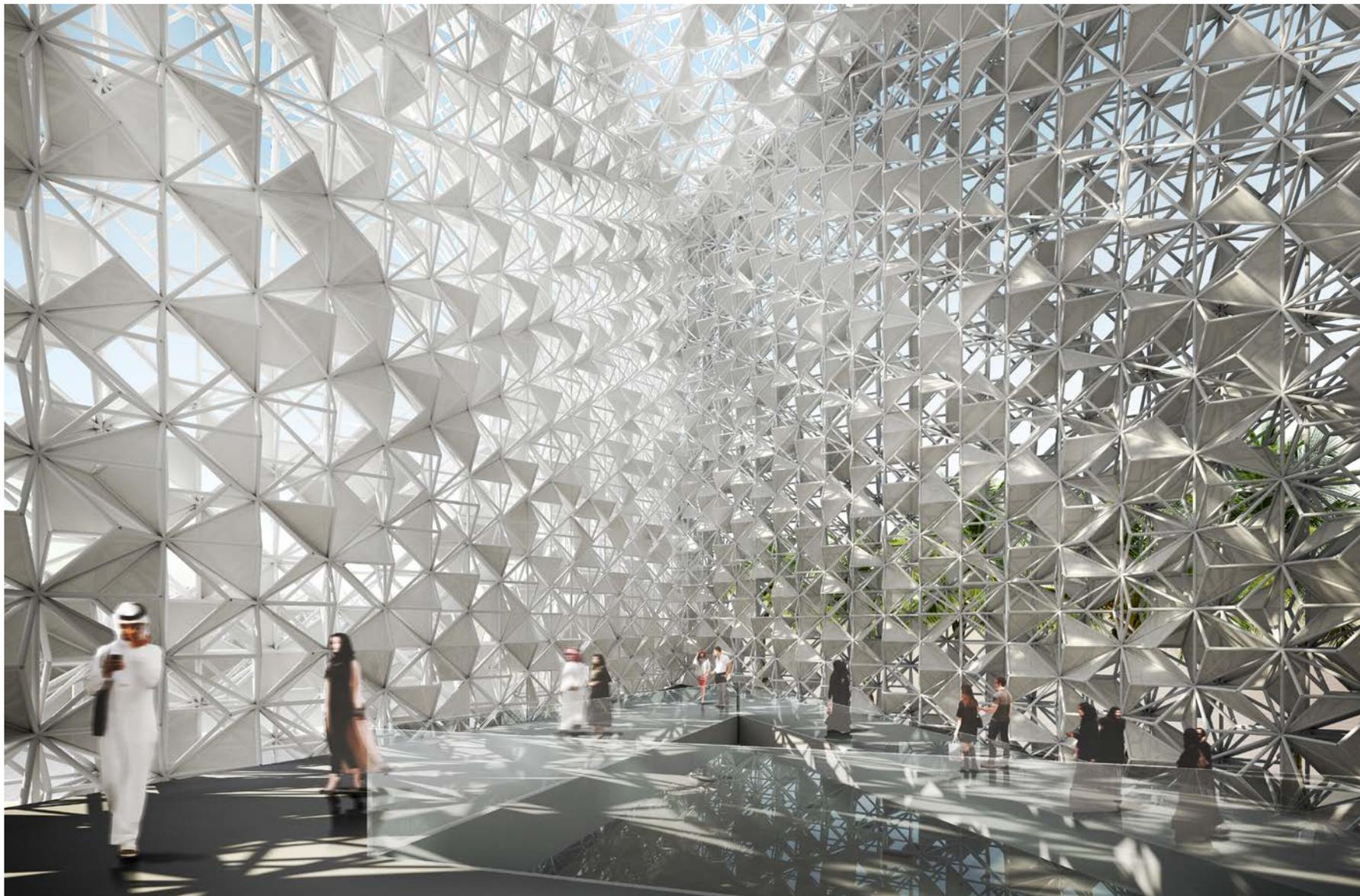
“繋がり”を象徴する立体格子による“光と影”によるモニュメント



古くから日本の美意識の中で大切にしてきた「光と影」「水と風」を現代的に表現



日本の伝統建築に通じる“光と影”によって生まれる繊細で大胆な空間



展示体験の流れ：

【Join】

来場者は「身分や立場を超えて、皆平等にもてなす」という日本古来の茶の湯の精神を体現した小空間に入る。博覧会に集う、国籍、年齢、趣味嗜好など異なるバックグラウンドを持つ人々が、ここで出会い、交流の一步を踏み出す。

【Sync】

来場者は広い空間を自由に探索しながら、世界が抱える様々な課題を五感で体験し、解決へ向けた知恵を探し出す。（来場者は、日本の技術のみならず、美しい伝統、文化、芸術などにも触れる。）

【Act】

来場者は一堂に会し、国籍や立場は違えども、同じ課題認識を持つ者同士が手を取り合って動き出す可能性を感じる。そして、人、アイデア、技術が融合した先にある美しい世界を共有体験する。

（「水」「風」「光」などの日本らしい自然をモチーフに、最新テクノロジーを駆使した没入感ある演出空間に包まれる。）

コンセプトの展開：

日本館のテーマである「地球交差点」は、建築・展示にとどまらず、日本館全体で表現され、来場者にユニークな体験を提供する。

具体的には、以下の分野での表現を検討していく。

- ・ イベント （例：伝統工芸×先端技術を体験するワークショップ）
- ・ レストラン （例：地域の食材と日本の技術を活かした共創メニュー）
- ・ 運営 （例：異文化・異素材の融合による新たなファッションの採用）